

地域情報（県別）

【群馬】2024年創設の群馬県女医会賞で地域貢献賞を受賞-菊地麻美・群馬大学医学部附属病院臨床研修センター副センター長に聞く◆Vol.1

群馬の医療界は「保守的すぎず、風通しも良い」

m3.com地域版

群馬大学医学部附属病院（前橋市）臨床研修センターの菊地麻美副センター長が2024年7月、同年に群馬県女医会が創設した群馬県女医会賞の第1回地域貢献賞を受賞した。県女医会賞は医学研究奨励賞と地域貢献賞からなり、地域貢献賞は地域医療において社会や医療などに貢献した女性医師に贈られる。菊地氏に受賞の喜びや地域での取り組み、群馬の地域医療などについて聞いた。（2024年8月7日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

——群馬県女医会賞の地域貢献賞を受賞されました。今のお気持ちは。

正直なところ、賞をいただけるほどの実績を積んできたのか自分でも自信がなく、過大な賞をいただいたという気持ちです。群馬県女医会のそうそうたる先輩方から受賞者として選んでいただけ、この受賞は「もっと頑張れるわよ」との励みだと受け止めています。素晴らしい先輩方を目標とし、これからも精進していきたいと、気持ちを新たにしています。



菊地麻美氏

——賞に応募したきっかけは何だったのですか。

群馬県女医会が賞の創設を検討しているという話は聞いていました。ですが、募集が始まって自分だけでは決心がつかず、周囲の勧めもあり、応募を決めました。

——菊地先生が県女医会に入会したきっかけは何だったのですか。

県女医会の役員も務めていらっしゃる安部由美子先生からのお誘いもあり、入会しました。勤務医や開業医、さまざまな分野の女性医師が集まっている点が魅力でした。また、日本女医会の平敷淳子先生（群馬大学医学部助教授を経て、埼玉医科大学教授、国際女医会の元会長を歴任）ら、女性医師の先駆者といえる立派な先生方が関わってこられた会でもあり、入会を決めました。

——臨床のほか、地域貢献として、どんなことに取り組んで来ましたか。

大きく2つあります。1つは教育。もう1つは女性医師としての活動です。

教育では、臨床医のサポートに取り組んでいます。臨床研修と専門研修に関わっていますが、中心は臨床研修です。また、医師の生涯研修を支援するため、リカレント教育（還流教育）にも携わっています。リカレント教育としては、臨床手技や理論のトレーニング、臨床研究の実践スキル研修などの機会を提供しています。

女性医師としては、女性としての経験を役立てられる仕事に取り組んできました。例を挙げますと、やりがいと自信につながったのは、当院の乳腺専門外来で「乳腺女性医師の会」という活動に取り組んだことです。私の専門は乳腺内分泌外科ですので、患者さんも女性が多いです。女性医師から女性患者へ、会報の発行や勉強会の開催などを通じて情報を発信できたことは大変良い経験となりました。

そのほかの地域に向けた取り組みとしては、群馬県医師会が2012年に始めた子育て中の医師へ保育サポーターを紹介する事業「保育サポーターバンク」の運営委員会と女性医師支援委員会での活動です。バンクに登録すると、保育サポーターに、子供の預かりや送迎などを手伝ってもらえます。私は子育てを経験している女性医師として、事業の立ち上げ時期から委員として関わらせていただきました。

また、近年当院では、臨床研修医や専門研修の医師が、子育てしながら研修を続けられる環境が整ってきています。具体的には、院内保育園の利用や育児休暇の取得、時短勤務などです。臨床研修センターではそのような制度を活用しながら、研修医がワークライフバランスを保てるように支援に取り組んでおり、最近では、研修中に女性医師だけでなく男性医師が育児休暇を取得することも増えてきています。

医局の現役医師として初めて出産を経験

——菊地先生ご自身の出産や子育てのご経験について教えてください。

私は2000年に第1子、2004年に第2子、2007年に第3子を出産しました。女性医師が少なかったということもありますが、所属する医局で現役医局員が出産するのは、私が初めてでした。当時の教授は理解があり、「絶対に辞めるな」と言ってくれました。そんな励ましも受け、私はどうやって続けていこうか、真剣に考えました。なお、私の現在の職場である群馬大学医学部附属病院臨床研修センターの事務所入口には「臨床研修センター」と書かれた一枚板が掛かっていますが、その字はその教授の揮毫でして、私にはとても思い出があります。

出産後は、子育てに時間を割かなくてはいけなくなりますので、ベビーシッターを頼んだり、働き方を変えたりなどし、何とか医師としての仕事を続けました。先ほどお話した保育サポーターバンクが始まってからは、私も保育サポーターさんに来ていただきました。2015年ごろの我が家では、ベビーシッターを週2日、保育サポーターを週3日、学童クラブは毎日、緊急の場合は臨時的保育サポーターも利用していました。

——群馬県の地域医療をどう見えていますか。

良くも悪くも、群馬大学を中心にまとまっていると感じています。良くない点は、県央エリアと周辺の医療格差が大きいことです。医師の人数も、県央の前橋医療圏が突出しています。この点は課題であり、これから過疎化も進むと思われますので、医師の配置をどうするかは大きな問題です（2020年時点で、人口10万人当たりの医師数は前橋医療圏が331.81人、吾妻医療圏は141.42人）。

良い点としては、若い医師の学ぶ環境が充実していることです。たくさんの症例が群馬大学に集まっていますので、経験も積みやすいですし、スキルアップもしやすいと思います。東京だと、領域や研修場所により十分な研修の機会が得られないこともあるかもしれませんが、群馬ではそのような心配はありません。指導する先輩医師も教育熱心な先生が多く、良い意味での縦のつながりが生きています。

また群馬は、車での移動であれば、交通の便が非常に良いと言えます。前橋や高崎に家があっても、車で移動すれば、群馬県内全域が通勤圏内となります。2時間程度移動すれば、県内のどこにでも行けるでしょう。実際に、前橋や高崎に暮らしながら、へき地医療に従事している医師もいます。

私は群馬の医療界を「古き良きつながりを残しつつも、保守的すぎず、風通しも良い」と感じています。医師不足もよく言われ、確かに医師は不足していますが、医師にとって働きやすい環境も群馬にはあると感じています。若い

医師にはぜひとも、群馬を選んでほしいですね。

◆菊地 麻美（きくち・まみ）氏

1995年、群馬大学医学部を卒業。同大医学部附属病院第二外科、高崎総合医療センター、公立碓氷病院、公立富岡総合病院、前橋協立病院、同大医学部附属病院乳腺内分泌グループなどを経て、2009年に同病院臨床研修センターへ着任。現在は、同センター副センター長、同病院地域医療研究・教育センター講師。臨床では乳腺内分泌外科を担当。医学博士。医学教育専門家。

【取材・文・撮影＝武井克真】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

